

十亀昭雄先生と弘南堂書店

高木庄治

弘南堂書店店主

私が十亀先生を見知ったのは極く古い。

昭和二八年春、東京八木書店（兼「日本古書通信社」）での一年の見習いから父の店「南陽堂書店」に帰って、結核による病弱で活動のできない父を助けての再興が急務であった。

その頃、そろばんの妙手であった兄（陽一、南陽堂二代目）は、市内のそろばん塾七、八カ所への算盤や、そのテキスト帳の販売配達に明け暮れていた。なにしろ未だ電卓の無い頃で、すべての計算はそろばんから始まり、就職には必須であった。

次男の私は、店頭本の値下げ、ストック品の資料整理や、古書らしい本は店頭へ、また店買いも目を追って多く、父の顔での出買いに追われた。店頭が充実するに比例して、学生さんを中心に先生方や、一般の本好きな方々で賑わい始めた。

その賑わいの中で、三〇円、五〇円均一から社会科学系や文学関係に至る棚をあさりに連日見えられ言葉交わすようになった一人が十亀先生であった。

父の店が軌道に乗り始め、兄も家業に興味を示し、結婚も決まり始めた頃、私は古本屋のような個性的な商売に、双頭の経営が向かないのではなからうかと思ひ、乏しい資金のなか独立を目指したのである。

今までの経験と知識を生かし、そのつど財布と相談しながら古本の仕入れに駆けめぐった。また、日時を費やし、函館、青森、盛岡、

仙台へと同業店に立ち寄り仕入れしながら上京し、全古書連の大会に参加して、一冊でも良いと思われ本を並べたいために労力は惜しまなかった。幸いこの時、私に協力してくれる伴侶が現れ、開店前の棚並べの準備等を手伝ってくれた。

昭和三二年一月一日、札幌医科大学前（南一条西一六丁目）に「弘南堂」と屋号しての店舗（間口一間半、奥行二間半）を持って独立したのである。場所がら店売りが思うに任せなかった中で、常連のようにおとずれてくれたお客様に十亀先生がおられた。円山地域に下宿していて、往き帰りの二回も顔を見せていただく事も稀ではなかった。

すっかり顔なじみになった先生は、毎回何がしかお求めになる。政治学を究めるのに、こんなに幅広く本を求めるものだろうかといぶかしく思うほどであった。もちろん、市内の古書店は言うに及ばず、新刊店も常時立ち寄られている。

私のところで伊藤整の『小説の方法』等が入って積み上げると、コレコレと言いながら数冊。「先生全部で一六五〇円です」が、——「付けといて」と、伝票を書くのと、ご自分の手帳にそのメモを書く。何時とはなしに、私は伝票を省略し、先生のたしかなメモだけが頼りで、「高木君、付けが三二〇〇円だから、取りあえず二〇〇〇円を入れとくね」（当時の初任給一万五〇〇〇円位）という具合であった。

また、ある時、東京本郷の「慶応書房」「宗文館書店」の古書目録を持ってきて、『岩倉公実記』（全三冊、昭和二年刊）、『條約改正史』（昭和一八年刊）など注文して欲しい。更に岩波の『日本資本主義発達史講座』（野呂栄太郎ら編昭和七年刊）を見つけたらぜひにと言われるのである。当時は今と違って、絶版古書は直ぐに注文をしないと売切れになってしまうので、弘南堂として即注文、同業一割引で、手数料が入るのである。開店早々にこのような具合で量販にしていたのだ。

この頃、十亀先生は北海道大学法科系助手から、北海道学芸大学（現「北海道教育大学」）に移られ、助教授（法政担当）として勤められた。ある日、生涯の伴侶となる下宿先のきれいなお嬢さんをお連れになった。弘南堂に時折見ええられる同じ大学の松久先生（生物担当教授）のご息女である事を伺い知って、驚いた。

その後、松久先生も週に一回ぐらい立ち寄り、菅原繁蔵の『樺太の植物』や、三輪勇四郎『日本甲虫分類学』など、比較的高価な自然科学書を求められ、おすすめた椅子に腰かけられる。話は娘婿になった十亀先生に及び、その読書欲に伴っての蒐集から、書物の量の多さに、わが家の土台の方が気になるご様子であった。

昭和三五年夏、私が東京での古書店修行中にお世話になった「日本古書通信社」の編集長、八木福次郎氏から便りが届いた。文面は、札幌を中心とした北海道の古本屋現況を顧客さん側から書いていただけの人を推薦して欲しい旨で、私は迷わず、十亀先生にお願いした。ころよくお引き受け下さった。

先生は当時三〇歳くらい、『日本古書通信』は周知していて、夏休みに古書集めを兼ねて、小樽、旭川、さらに釧路へと取材して書いて下さった。昭和三五年十一月号に「随筆・古本屋地図」の項に「北海道―小樽・札幌・旭川」と題して、各店の地理的条件、扱い分野、

さらに店主の個性に及ぶ古本屋巡りである。これは戦後初めての記事で読書家に多く読まれた。

昭和三七年正月、より良い場所へと家内が見付けた北大いちょう並木前（現、北一二条西四丁目）に弘南堂は移転した。

先生は、その後も間断なく、自分の研究対象や、知識欲のおもむくまま新・古を問わず購入された。しかし、家庭を支えられた奥様にとつては、そのヤリクリは大変であつたらうと想像にかたくない。

平成に入ってから、藤女子大学の非常勤講義のあと、弘南堂に寄られ専ら近現代文学の個人全集を求められた。そうして先生から体力づくりのマラソンをしている話を聞かされた。しかし私には、一生懸命自らの仕事をなさっている姿の方が強く感じられた。

平成のバブルがはじけ、活字文化のデジタル化の進む中、全国古書業者（新刊店も同様）の店頭販売の不振が伝えられ、弘南堂でも中古本や、全集類が売行不振、価格も低落し始めた。この折りに全国古書籍商組合連合会では、インターネットによる販売事業に乗り出した。

◇ ◇ ◇
いまから、十年ほど前の平成一四、一五年頃の春であつたらうか、久しぶりに十亀先生からの電話の声。「高木君、もう使わなくなつた古本や、雑誌など整理したいので来て欲しい」旨。

約束の日、午前一〇時頃、もう弘南堂営業の第一線に立つ息子庄一と一緒に、真駒内のお家に伺った。実はかねて話に聞いている堅牢な書庫を備えた住居には、この時初めて伺ったのであった。

先生と奥様に迎えられるながら、ごあいさつもそこそこに、先ず各種全集物や附属の研究書、政治思想関係等の置いてある中二階風の木造書庫に圧倒され、タメ息が出た。恐らく万冊に及ぶだろうと思いつながら、半地下に案内される。そこに五〇、六〇箱のダンボール



十亀先生ご自宅の居間で、左から高木庄治さん、十亀先生、ご子息の高木庄一さん
(平成14、15年頃)

「それはもうダメかね」と洩らす。「高木君、何かもとの川に戻すみたいだね」。

「ええ、そうですね。しかし、上手く流れると良いのですが——」
のような会話を交わしながら、一〇箱ぐらいを整理し、分けていただく本の山を築く。慎重に値踏みし、先生の了承を得る。ほとんどフリーパス。残した本や雑誌は町内の故紙回収に出される由であった。

四〇分ぐらいの作業のあと、暖炉風な作りに石油ストーブが置いてある茶の間に通され奥様は私たちに昼食の用意をして、既にちやぶ台に並べてあるのである。

に詰まった、戦前の古い本や、雑誌と資料が入れてあるそうで、先ずこれを整理したいとおっしゃられた。

早速私たちは上着を脱いで、そばにあった大きな学習台の上ののせ、箱から取り出す。先生を交えて、これからも活用されそうな本を選ぶ。弘南堂にとつては商品として流通しそうな本ということになる。先生が

坐つてご馳走になりながら、最近の古本業界のあれこれを語り合う。私は中二階の木造作りの書庫の堅牢さについてたずねた。先生曰く、「これは木造住居作りの『木の城たいせつ』社の第一号だよ。社長自ら建てる前に向いて、先ず本の量を調べに来てね」と語り始めたのを思い起こすのである。

また、茶の間の書棚には最近（昭和六〇〜平成五年）の豪華美術書がずらりと並べられ、先生はコンナ本にも興味を持たれたのか、一冊三〜五キロもあり、定価もみな万以上で、これは丸善で喜んで届けにきたのでは——と話すと、奥様がすかさず「高木さん違うんですよ。主人が一冊ずつ持ち込んで、私の知らない内にそつと棚に入れるんですよ」と。私たちは苦笑いしながら聞いた。

今日の整理した精算分の代価を支払うと、先生はその場で奥様に渡され、奥様は、先ずは仏前に供えられるのあった。このような方法で、週に一度ぐらい五、六回続き、半地下に置いてあった分の整理を終えた。

◇ ◇ ◇
私の出番はこれまでで、二、三年の後からは、弘南堂二代目庄一がお伺いした。

古書（新刊）もIT化の波がさらに進む中、需要相も少しずつ変化（悪化）し、古書の取り扱いにも慎重を期した。

このようなき中、十亀先生ご夫妻は、医師であったご長男のご不幸に見舞われ、自らも不治の病床につかれた。

しかし、中断しながらも蔵書の整理は続けられた。お伺いし、一通りの作業と評価を終えてから息子庄一が奥様の心痛と気苦労を思つて、いくら固辞しても、必ず食事を用意され、その上、手みやげまでいただいて帰ってくるのであった。

いまは泉下の先生のご冥福を祈るばかりである。